

歴史的市街地・佐原における高校生のみちづくり参画を通じたその課題と意義の検証

正会員 ○浜田 愛*
正会員 中野 卓**
正会員 窪田 亜矢

地縁強化 地方都市 伝統的建造物群保存地区
担い手育成 進行性リスク 高校生まちづくり

1. 研究背景と目的

近年、地方都市では人口減少に伴う地域文化の担い手減少が課題とされており、コミュニティや文化の持続性の観点から、次代の担い手育成が急務とされている。本研究で扱う千葉県香取市佐原地区もそうした課題を抱えた地区の1つである。本地区は、かつて江戸との水運で栄えた在郷町であり、その中心地の川や街道沿いには歴史的町並みが保全され、関東で初めて重要伝統的建造物群保存地区に指定されるなど、歴史的資源を活かした観光まちづくりが進められている。一方で、自動車の発達により中心地区の求心性は低下し、現在は若年層を中心とした人口減少により、その歴史的資源の継承も危ぶまれている。こうしたリスクへの対応においては、日常的にまちを利用し、将来的に地域を支え得る存在である学生など若年層が地域に対して愛着形成を図り、それによって次代の担い手育成を図っていくことが重要となる。

そこで、本研究ではアクションリサーチとして、千葉県立佐原高校の協力の下、高校生が地域に興味を持ち実際にそのまちづくりに参画することを目的とした「高校生まちづくり」に取り組んだ。本取り組みを通じて、高校生のまちづくり参画の課題と意義を検証した。

2. 佐原における高校生まちづくりの概要

2.1 高校生のまちづくりへの参画の経緯

筆者らは、2009年より香取市と連携して住民のまちに対する記憶や認識、想いを取り込んだ観光まちづくりの研究を進めてきた。その一環として、2013年12月に佐原高校の生徒に対して日常生活行動に関するグループインタビューを実施したところ、高校生が歴史的地区を積極的に避けて生活していることが判明した。歴史的地区を避ける理由として、観光地化に伴う物価の上昇、観光車両等の交通量の多さによる通行の危険性などが挙げられた。また、最寄り駅の鉄道本数が少ないことから下校時の特定の時間に高校生が通学路に殺到し、地域住民の反感を招くなど地域と高校の間で少なからず不和が生じており、そのことを生徒自身が敏感に感じ取ってまちを敬遠するという負のサイクルに陥っていることがわかった。

こうした問題に対し、高校生が地域の課題を考え地域の人々に関わる契機を持つべく、佐原のまちに興味がある有志の生徒が集い、2014年1月に「佐原まちづくり

プロジェクト(SMP)」が結成された。また、筆者ら大学院生とSMPの協働まちづくり活動を「さわら部」と名付け、2年以上に渡って、高大連携で住民や観光客へのインタビュー調査やまちあるきツアー等のイベントを実施した。

表1.SMPの活動の整理

活動の種類	種類	活動内容
①空き家活用	・旧飯田家 ・正文堂書店 ・旧土屋刃物屋	・部活動の場(演劇部・美術部・写真部・将棋部など)
②調査活動	・ヒアリング調査 ・路地裏調査	・地域住民ヒアリング ・大学院生への同行 ・路地めぐりクイズラリー
③地域イベントとの連携	・佐原高校文化祭 ・建物公開 ・まちぐるみ文化祭 ・大祭 ・盆フェスタ	・さわら部企画 ・観光客への説明 ・竹あかりづくり ・写真展示 ・大学院生展示の場と同行
④ワークショップ	・路地ツアー ・まちあるきワークショップ ・空き家活用ワークショップ	・主に地域イベント期間中などに開催 ・高校生による説明や誘導
⑤その他イベント	・感謝祭 ・報告会	・お世話になった方々と立食パーティ ・高校生からの活動の報告と提案

2.2 高校生を中心とした空き家活用「さわら部」の取組み

こうした活動の一環として、2014年6月から2015年3月まで、香取市が管理する伝建地区内の改修空き家を使って「さわら部」をオープンし、高校生を中心とした空き家の活用実験を行ってきた。「さわら部」では、高校生と地域住民と観光客の接点作りを目標に、生徒らによる観光案内や週末のイベント開催、また平日には高校の部活動が行われるなど、定期的に活動を行うことで①高校生と地域住民とのコミュニケーションの誘発、②高校生による地域への理解の深化、③地域住民の高校生への理解の深化の3つの効果が、本取り組み関係者へのインタビューを通じて確認された。こうした取り組みが認められ、現在は2軒目の「さわら部」が運営されている(図1)。

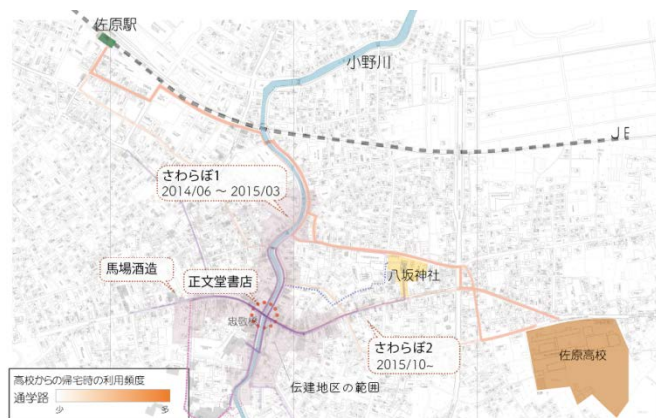


図1.佐原地区内の関連施設図

3. 高校生のまちづくり参画と支える組織の構造整理

次に、2章でまとめた SMP・さわら部によるまちづくり活動を、活動団体および学校内部の構造(3.1)と、それ以外の外部に位置する地域組織との関係性(3.2)の2つの視点から整理する。

3.1 高校生の役割から見たまちづくり活動の内部構造

本取組みにおいて高校生の担った役割は、①コーディネーターとして企画を提案、②活動の広報、③部活動など他の高校生と地域の間を繋ぐ連絡や企画マネジメント、の以上3点にまとめられる。一方で、一般的にまちづくり活動を行う際には、「企画提案」「広報」以外にも、外部組織との連絡を司る事務局や、活動記録、情報の蓄積など目的により多岐に渡る役割が必要で、これらを高校生だけで担うことは不可能である。したがって、このような活動の持続のためには活動の支援者が必要であるが、現状ではその大部分を大学生が担っている。また、高校生は在校期間が3年と短いため高度なまちづくり知識の習得が困難であり、そのストック化は難しい。加えて公立高校の場合は教員の異動が頻繁に起きるため、活動のノウハウが学校内部で継承されないという課題がある。

以上を踏まえると、高校生まちづくりにおいては、高校だけでその活動を継続することが困難であり、活動を支援する外部体制の構築が重要な意味を持つ。

3.2 外部組織との関係性の変化

伝建地区である佐原では、住民らによるまちなみ保全を中心としたまちづくり活動が盛んで、様々なまちづくり組織や市民団体が存在している。そうした団体が高校生のまちづくり参画を支える外部体制として期待される。特に、伝建地区のまちなみ保存・観光案内を担う「NPO法人小野川と佐原の町並みを考える会(以後、考える会)」や、地元商店の女性団体「佐原おかみさん会」、文化・芸術的振興を図る「佐原アカデミア」、香取市役所の4者とは、イベント等での協力を通じて、高校生のまちづくり

活動参画に協力的な関係が形成されてきた(図2)。

こうした関係が好影響を及ぼした事例の1つが、さわら部運営である。さわら部は、その活動発足時は市の社会資本整備総合交付金事業として1年限りの予定で終わるものとされていたが、2015年10月以降、市から「考える会」へ委託された空き店舗対策事業を利用してその継続支援が可能となった。こうした経済的支援以外でも、イベント開催に必要な道具の貸し借りやミーティング場所の提供、活動の相談やイベント等の協力など多岐に及び柔軟なサポートが提供されている。また、2.1で言及した通り、従来高校生と地域には一定の距離が生じていたが、外部組織の支援により、地域住民と高校生の対話が生まれて双方を橋渡しする副次的効果をもたらした。

4. 活動から見た高校生のまちづくり参画手法の考察

高校生のまちづくり参画は行政や地域組織などの活動の受け皿的な支援と、学校を含めた組織内部からの支援を元に実現されることが分かった。一方で、活動継続に当たっては、持続的な主体として期待できない大学院生と学校教員が担う部分を、地域で補填することが今後の課題となる。また、組織運営上の課題として、高校生の引き継ぎ問題があげられる。短いサイクルで構成員が循環するため、地域にとっては構成員との個人的関係性を定期的に解消するプロセスが繰り返される必要がある。以上を踏まえると高校生のまちづくり参画には、その限界を把握しつつ意志を汲み取り継続的に支援する存在による深い理解と支援が必要であると考えられる。

一方で、高校生のまちづくりへの参画は長期的な担い手づくりを超え、高校生自身のみならず、その活動を支援する地域側にとっても副次的な波及効果を見せ始めている。支援に必要な高校生のまちづくり参画は、既存の利害関係に囚われない新たなまちづくりの枠組みを生み出し、これまでまちづくりに縁遠かった人の活動への参画を促す効果があると考えられる。

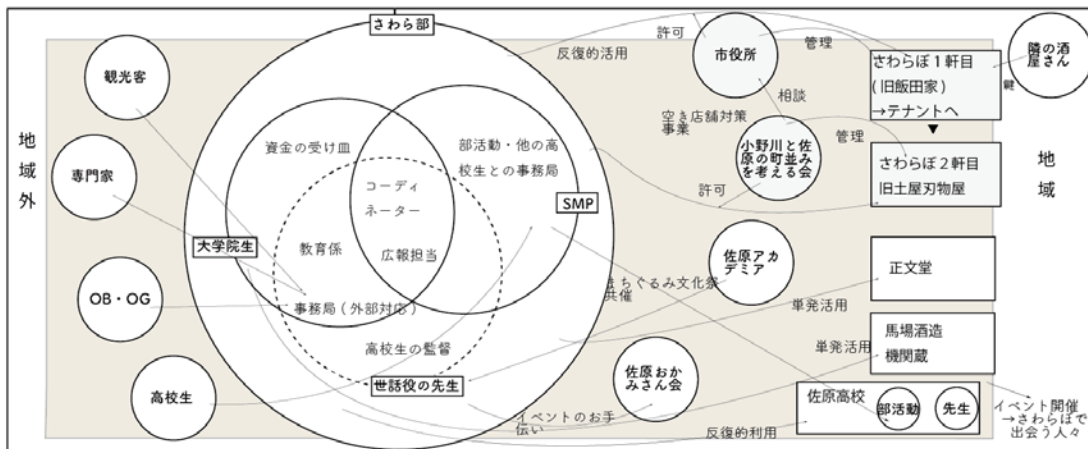


図2. さわら部内外の組織関係図

*修士課程, 東京大学大学院都市工学専攻
 **博士課程, 東京大学大学院新領域創成科学研究科, 環境修
 ***特任教授, 東京大学大学院都市工学専攻, 工博

*Master Student, Dept. of Urban Engineering, the Univ. of Tokyo
 ** Doctor Candidate, Graduate School of Frontier Sciences, The Univ. of Tokyo
 ***Project Prof., Dept. of Urban Engineering, the Univ. of Tokyo, Dr. Eng